

---

# ラストミッション (マイアール皇国記外伝)

オリオン

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ラストミッション（マイアール皇国記外伝）

### 【Nコード】

N1354B

### 【作者名】

オリオン

### 【あらすじ】

金次第で仕事を請け負う組織「ギルド」に所属する師弟コンビタックス&ルーシー。二人の最後の仕事は、全く危険のない筈だったが、お互いを思いやるが故に事態は思わぬ方向に向かっていった。悲しい師弟愛が心を打つ作品です。

発端

田舎道が一本つづく。そんな風景の先に、とある小さな村があった。赤い屋根の教会を中心に栄えるその村は、とても長閑<sup>のどか</sup>だった。しかし、そのほのぼのとした風景とは裏腹に、村は大事件に見舞われていた。

「くそ！ 嫌な感じだ！」

クロテニア公国の国境警備騎士団、白狼長を務めるマンソン子爵は、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。彼は、歳の頃は三十がらみ、いかにも現場の叩き上げを思わせる日に焼けた顔と、逞しい体つきをしている。そのため、騎士団の華麗な衣装が似合わない感じがした。

「何としても、人質を無事に救出しなければ！」

マンソン子爵の目の前には、赤い屋根の教会があった。子爵の配下である騎士たちが、その周りを包囲している。騎士団は、白い胴衣を着ている。紋様は、紅い染め抜きで、剣と盾だ。これがズラリと並ぶと、絵的にはとても綺麗だ。

しかし、教会の中から血走った目でこれを眺めている男たちにとっては、とてもそんな風には見えない。

実際、教会の中には、獰猛な連中がいた。

「くそ！ 完全に囲まれてるぞ！」

窓の隙間から外を覗く男が、仲間に向かって叫んだ。彼は、あまり身なりがよろしくない。ボロ着を身にまとい、使い古しのベルト

を腰に巻いていた。ベルトには、柄に滑り止めの革を巻き付けたナイフを、二本、差している。

教会の中には、彼を含めて仲間が十人いた。彼らは、クロテニア公国内で最も恐れられている、グールズ盗賊団のメンバーだった。彼らは、なぜ追いつめられたのか？それは、約五時間前に遡る。さかのぼ

それは、簡単に終わる筈の仕事だった。ただ、森の小道をたつた一台で通る荷馬車を襲う。グールズ盗賊団に取っては、毎日の習慣、例えるなら、歯磨きより難易度の低い仕事だった。

荷馬車を襲うのは、グールズ盗賊団の一部隊、仔鹿組。その数、十六名。荷馬車を取り囲んで、一斉に襲いかかった。

「くそつたれ！」

仔鹿組の組頭を務めるジョンは、大声で叫んだ。

それは、罨だったのだ。馬車の荷台に積んであったのは、お宝ではなく、剣を構えた騎士たちだった。

激しい戦闘が始まると、森のあちこちから、馬に跨った完全武装の騎士たちがやって来る。ジョンたち仔鹿組は、国境警備騎士団の策略に落ちてしまった。

しかし、騎士団にも大きな誤算があった。それは、仔鹿組による常識外れの抵抗だった。そのため、十人に包囲網を突破され、森の近くにある平和な村の教会に立て籠もられていた。

強襲！

何の進展もないまま、五時間が経った。人質の数は五人。司祭と四人の子供たちだ。彼らは、教会の奥にある祭壇の下で、体を寄せ合っている。盗賊団の配置は、人質を取り囲むように五人。後の五人は、入り口付近に居た。

やがて、日が傾き始め、今までとは反対側のステンドグラスの明

かり取りから、虹のような光彩が差し込む。教会の中で変化が起きたのは、その時だった。

「そろそろ、終わりにしません？」

ニコリと笑いかけてきたのは、一人の少女だった。

彼女は、扉側の五人に近づいて行った。

その少女の出現に、盗賊たちは啞然としていた。慌てて、人質の人数を数える。人質の子供たちは、減ってはいない。すると、目の前の少女は、何処から来たのか？

彼女は、金色のサラサラした髪を短めにカットしていた。それは、まるで男の子みたいな髪型だった。瞳の色は青灰色。ひどく寂しい色だった。ピンク色の唇が、白い健康的な肌に映えている。背は小柄で、曲芸師のようにスリムで軽やかだ。ゆったりとした空色の上着に黒いズボン。ズボンの裾は、動きやすくするために赤いリボンが巻いてあった。靴は、なめし革の短い物を履いている。彼女は、何も武器を持っていないようだった。それに、とても可愛らしい。だが、盗賊たちの勘が、目の前の少女が危険だと知らせていた。

まず、三人の盗賊が、ボーガンを少女に向けて発射した。

彼女は、体が柔らかい所を見せた。前後開脚で床にペタンとついたので。三本の矢が、彼女の頭上を通過する。

最初の攻撃を避けられた三人の盗賊たちは、腰の剣を抜いて斬りかかるうとしていた。その時、少女の左手から金色の糸が繋がっていることに気が付いた。糸の先には、金の釣り針が付いていて、それぞれの服に引っ掛かっていた。

「何だ？ こりあ？」

盗賊たちが疑問に思った直後だ。目の前の少女の髪が逆立ち、目の色が金色に変わる。

「雷いかずち！！」

彼女が叫ぶと、左手から伸びる金色の糸が、輝く光の糸に変わった。そして、それに繋がる盗賊に電流が流れる。三人の盗賊は、そ

の場で気絶した。

「こいつ！ 魔法使いか？ さては、ギルドだな！」

残りの内の一人が、剣を引き抜き、仲間の仇とばかりに斬りかかった。しかし、少女が頭上に両手で差し出した光の糸に阻まれ、火花を散らす。

その盗賊も、少女の魔法能力「雷」の洗礼を受け、その場で気絶した。

一方、少女の後ろにも、五人の敵がいた。こいつらが、少女に襲い掛かるうとする。その時、その内の一人が、いきなり誰かに突き刺された。

見ると、何もない空間に、長い刀の刀身だけが存在した。

その刀は、そのままファスナーでも開くように空間を切り裂き、一人の男を出現させた。謎の男は、濃紺の衣装で全身を包み、東洋独特の片刃の長刀を携えていた。背は高い方ではなく、痩せ型。黒髪に表情の少ない顔立ちだが、冷たい感じは無く、自然体といった雰囲気だ。彼は、刀を鞘に収め、腰を低くして構えた。

「こいつ！」

盗賊たちが剣を振り上げた刹那！謎の男の刀が閃く。四人の盗賊たちは、自分たちが斬られたことを認識していた。しかし、その証拠となるはずの刀傷が見当たらない。すると、服に血が滲んできた。どうやら、服を切らずにその下の肉を斬ったらしい。盗賊は、驚きの表情を残して倒れた。

最後に残ったのは、グルズ盗賊団の仔鹿組組頭、ジョンだけだった。

「仕方ねえな！ 俺だけ生き残っちゃったらオヤジ（クリード）に申し訳が立たないからな！」

ジョンは、少女に斬りかかる。

少女は、三本の金糸を左手から放った。

ジョンは、両手にナイフを持つと、先に釣り針の付いた糸を弾き

飛ばした。少しビリツと来たが、ナイフの柄に巻いた鹿革のおかげで気絶せずにすんだ。

「おたくの手品は通じないぜ！」

それでも少女は、今度は右手から三本の金糸を放つ。

「おたくには、学ぶ姿勢がまるでないんだな」

呆れ顔のジョンは、再び金糸を弾く。しかし、今度はさつきと違った。弾かれて地面に落ちるはずの金糸が、ジョンに吸い着けられるかのように向かって来たのだ。そして、ピタリと張り付いた！

理由は、最初の攻撃にあった。最初の攻撃で少女は、ジョンの体に、極の電気を帯びさせたのだ。その後、+極の金糸を投げたので、金糸は勝手にジョンの体を求めて行ったのだった。

少女は、電気の特性などは知らなかった。電気という言葉さえ知らないだろう。ただ、今までの実践の経験から、そんな使い方ができることを学んでいた。

「おい、俺の負けだ。さつきと決着をつけるよ！」

ジョンが、諦めたように呟く。

少女は、少し悲しい顔つきになると、叫んだ。

「雷！<sup>いかすち</sup>」

残りの一人を片付けると、少女は、謎の男に近づいた。

「師匠、終わりました」

師匠と呼ばれた男は、再び刀で空間に切れ目を入れた。今度は、

そこに入るためだ。

「ルーシー、帰るよ」

無愛想な印象だが、声は優しい。

帰り際、男は人質に向かつて軽く会釈した。ルーシーの方は、子供たちに向かつて笑みを浮かべる。

二人は、現れた時と同じように、幻のように消えた。

人質だった五人は、まるで夢を見ている気分だった。ただ、死傷

した十人の盗賊の存在が、それが現実だったことを物語っている。そして、去り際の少女の瞳が、いつまでも印象に残った。

### ラストミッション

一週間後、クロテニア公国で立て籠もり事件を解決した二人は、マイアール皇国の首都、マイアールで、次の仕事の依頼を受けていた。

そこは、酒場の一階だった。マイアールで一番の賑わいを見せる店「孔雀亭」。

その店のテーブル席に向かい合わせに座る二人の男。彼らの内の一人は年配で、一見、普通のおじいちゃんだが、目つきが鋭い。もう一人は若い男だ。濃紺の衣装に身を包み、腰に長刀を差している。髪の色は黒く、目は山葡萄のように深くて落ち着いた色だ。憂いを含んだ表情は、少し東洋系が入っている。

「タックス、クロテニアではご苦労だったな」

年配の男が若い<sup>若い</sup>の言葉をかける。それに対して、若い男の方は不満げだ。

「頭、危ない仕事は回さないはずでしたよね」

タックスは、あまり強い調子ではなかったが、しっかりと非難の意思を伝えた。

それに対して頭は、高圧的な態度に出る。

「俺達ギルドに、多少の危険は付きものだろ？何だ、トウシロウじやあるまいし！」

興奮するお頭に、タックスは、相変わらずの冷静な話し方で、静かに語った。

「それと言うのも頭、ルーシーをこれ以上、戦いの場に出したくないんです。あの娘は、いつも相手を気絶させるだけで、命を取るような事はありません。多分、死なないように魔法力をセーブしてい

るんでしょう。今後、その甘さが命取りにならないとも限りません。ですから、一瞬の判断が生死を分けるような仕事はさせたくないんです」

情に訴えかけるようなタックスの話聞いた頭は、ついしんみりとした。

「悪かった。たまたまお前達しかあの近くにはいなかったし、どうしても断れなくてな。なんせ、クロテニア公から直じきのお願いだ。なんでも、人質の中に、クロテニア公の娘、エルシーク姫がいたそうだ。あの時、人質の中に、十歳くらいの綺麗な女の子を見なかったか？」

タックスは、記憶の糸を辿った。

「そういえば、一人だけ気品のある子供がいたような…」

「よく思い出しとけ。また縁があるかもしれねえぞ。ところでよ、ルーシーは、まだ俺を怖がっているのか？」

お頭とタックスがいる席からかなり離れた席に、ルーシーは座っていた。彼女は、青灰色の大きな瞳で、こちらをじっと見ている。

「お頭の顔が怖いんでしょう」

タックスが、苦笑まじりに答える。

「それにしても、いくら何でも離れすぎだろ！」

納得がいかない様子のお頭を、タックスがとりなした。「まあ、許してやってください。ところで、仕事の件ですが？」

タックスに促され、慌ててお頭は本題に入った。

「今度の仕事には危険はないぞ。早速だが、明日から開催される馬上槍試合で、スカロンという新人が出る。そいつを優勝させるために、二人の有名な騎士を出場不能にして欲しい。ジークフランドル卿と、ジュードパージ卿だ。ただし、殺しは駄目だ。事が大きくなる」

タックスには、依頼主の意図がピンと来た。「賭けが絡んでますね？」

「ああ、しかも莫大な金額だ。受ければ、報酬もすごいぞ」

タックスは、すぐに了承した。

「やらせて下さい！お頭。これを、ルーシーと組む最後の仕事にします」

「タックス！ ルーシーと別れてどうするつもりだ？」

お頭の質問に、タックスは沈んだ声で答えた。

「彼女には、まとまった金を持たせてギルドから足を洗わせます。

私は、次の相棒が見つかるまでは、一人で仕事をします」

タックスのこの台詞が出た時、遠く離れた席に座るルーシーが、顔を曇らせた。

打ち合わせを終え、お頭と別れたタックスに、ルーシーが寄り添った。酒場を出て、宿に戻る。

タックスとルーシー、この二人は、ギルドと呼ばれる組織に属している。ギルドとは、合法、非合法を問わずに危険な仕事を請け負う所だ。例えば、盗み、暗殺、脅迫、などをするかと思えば、救出、護衛、助っ人、などの仕事もこなす。つまり、金次第だ。

二人は、宿屋に着くと、すぐに部屋に入った。

「ルーシー、今夜はお仕事をするから、早く寝なさい」

ルーシーは、タックスの言葉に素直に従った。ベットにスルリと潜り込むと、体を丸めて眠った。

その寝顔は、とても気持ち良さそうだった。

「まったく、しょうがない娘だ・・・」

もうすでにお年頃のルーシーを、タックスは何度も別の部屋にしようとした。だが、寂しがり屋の猫みたいに、彼女はタックスのベットに入って来てしまうのだ。だからといって、男女の関係になるわけではない。タックスにとってルーシーは、妹みたいな存在だった。

次の日の朝、タックスとルーシーの二人は、馬上槍試合の試合会場にいた。

各公爵家の館や、教会などの高い建物に囲まれ、まるで都市部へそみたいに見える。馬上槍試合の会場は、そんな場所だった。

数万の観衆の目が、その両雄に注がれていた。槍先の誉れを尊ぶ誇り高い騎士たちが集う馬上槍試合は、準決勝まで進んでいた。

色鮮やかに飾りつけされた馬。銀色に輝く鎧。左手に盾を持ち、右手には三メートルあまりの長槍を持つ。両雄の間には、五十メートルの距離があった。それが、合図の旗が振られた瞬間、ぐんぐん短くなる。

そして、激突の瞬間！擦れ違いざま、片方の騎士が落馬した。

<ジューパージ！ パージ卿！>

観衆が、勝利者の名を称える。

勝利者は、頭上に槍を振りかざしてそれに答えた。

そして、皇王や貴族たちがいる立派な特別観覧席に、深々と頭を下げると、颯爽と走り去った。

興奮冷めやらぬ観衆が、急にざわめき出したのは、その時だった。それは、次はスカロン卿とジークフランドル卿との試合なのだが、ジークフランドル卿陣営から、出場辞退の意思表示である白旗が出ていたからだ。

その白旗を見て、大衆席にいた二人が立ち上がった。そして、試合会場を後にする。

「師匠、うまくいきましたね」

ルーシーは、嬉しそうにタックスに話しかけた。

「まあ、さすがのフランドル卿も、鎧を盗まれては出場できないだ

る。鎧は、体に合わせてオーダーするから、他の人では合わないし、たとえ合ったとしても、恥ずかしくて借りられないだろうしね」

無事に一仕事を終えたタックスとルーシーは、宿の部屋でささやかなご馳走を味わっていた。明日の決勝戦にジュードパーヅ卿を出場させなければ、この仕事は終わる…。

タックスは、この仕事を最後にルーシーにギルドから足を洗わせようと考えていた。だから、彼に取っては、これが二人の最後の晚餐になる予定だった。

その事は、ルーシー本人は知らないはずだ。なのに、彼女はあまり元気がない

「どうしたんだい？　あまり食が進まないようだね」

タックスの問いかけに、ルーシーは小さな声で答えた。

「師匠、わたし、足手まといですか？」

ルーシーは、青灰色の瞳を伏せていた。

「なぜそんな事を聞くのかな？」

ルーシーは、タックスの問いかけに答ええない。タックスは、ルーシーの顎の下にそっと指を添えて持ち上げる。

「ほら、話してる時は相手の目を見なければだめだろ？」

タックスは、言葉を失った。ルーシーは、泣いていたのだ。涙が、きめ細かい肌の上を、玉状になつて転がる。

「ルーシー、昨日のお頭との話を聞いていたのか？」

あんなに離れて座っていたのに？」

タックスの質問に、ルーシーは涙を拭いてから答えた。

「唇の動きを読んだの…」

「そうか…それなら話が早い。ルーシー、君はこの仕事を最後に、ギルドから足を洗って普通に暮らすんだ。まとまった金も用意する」  
タックスの申し出を、ルーシーはキツパリ拒絶する。

「嫌です！」

ルーシーがこれだけハツキリものを言ったのは、タックスが知る限りこれが初めてだった。

「聞き分けのない事を言うもんじゃない！ 君は、ギルドに居るには優しすぎるんだ！ 私に拾われた恩なら充分に返して貰った。これからは、自分の人生を歩んで欲しい」

タックスは、いつになく強い調子で説得した。それが、ルーシーのためになると信じていたからだ。

「師匠！わたしはまだまだ師匠の役に立ちます！ わたしを一人にしないで！」

ルーシーもまた、食い下がる。

「ルーシー、君は何が望みなんだ？何をしたい？」

タックスのこの質問に、ルーシーは黙り込んでしまう。そして、下を向いた。

「……」

やがて、意を決したように顔を上げると、ぶたれるのを恐れる子犬のように、遠慮がちに言った。

「わたしの望みは、師匠のお嫁さんになって、どこか遠くで静かに二人で暮らすこと……」

ルーシーの答えに、今度はタックスが沈黙する番だった。

「……」

しばらく、気まずい雰囲気流れる。

「嘘、嘘、本当は何も考えていません。だけど、師匠の役に立ちたいのは本当ですよ。だから、チャンスを下さい。わたし一人でジューパージ卿を試合に出られなくしたら、また一緒に仕事をして下さい。もし失敗したら、師匠の前から消えますから……」

ルーシーの提案を、タックスは検討した。人見知りで引込み思案。自分からは決して攻撃できないルーシーが、この仕事を成功するとは考えにくい。

「いいでしょう。私はいつさい手助けしませんよ」

タックスの言葉に、ルーシーは頷いた。

そして、部屋から出ようとしてドアを開ける。その時、タックスに向かつて振り返った。

「師匠は、わたしと別れて寂しくないの？」

その言葉がタックスの胸に響いた時、部屋のドアがボタンと閉まった。

ルーシーが出て行った後、タックスは、彼女が残した言葉の意味を考えていた。

ルーシーとタックスが初めて出会ったのは、三年前だった。ルーシーは、奴隷市場で売りに出されていた。それを、タックスが買い取った。魔法能力があると見込んでのことだ。いわば、利用できそうだから買ったまでのことだった。最初の一ヶ月、彼女は一言も喋らなかつた。口がきけないのかと思つたほどだ。しかし、徐々にタックスに対して心を開き、とても慕ってくれていた。

「寂しい？ そんなはずはない」

しかし、否定してはみたものの、何故か不安が消えない。

「それにしても、ルーシーは遅いな」

彼には珍しく、イライラしていた。それは、すぐにシヨンボリして帰って来ると考えていたルーシーが、なかなか帰って来ないからだ。

「やはり、私も寂しいのかも知れない。今まで考えもしなかつた。

ルーシーがいない生活を……」

タックスは、改めて考えてみて、自分に取つてルーシーがいかに重要な存在になっていたのかに気が付いた。

彼女が「二人で暮らしたい」と告白したとき、なぜ黙ってしまったのか？

「すまないルーシー、私がバカだった。一緒に暮らそう。二人で土でも耕して、共に生きよう。そして、ギルドから足を洗おう」

タックスは、ルーシーを追って飛び出した。

最後のお願い

一方、ルーシーは、彼女なりにちゃんと計画を立てていた。彼女は今、ジュードパージ卿の館の厩しゅまにいた。馬に下剤入りの餌を食べさせて、明日の馬上槍試合を棄権させるつもりだった。

「君たちには可哀想だけど、師匠の側にいたい。ごめんね」

馬に下剤入りのニンジンを食べさせながら、ルーシーは謝った。馬上槍試合用の馬は六頭だった。

「おい、お前、何してる！」

突然、声を掛けられた。振り返ると、背の高い男が立っていた。

彼は、筋骨逞しい男だった。腰から剣を下げている。顔立ちは、顎がかなり張っていて、いかにも頑固そう。瞳の色は緑で、目は小さい。鼻が大きく、口も大きく、大胆な作りの顔をしている。

「お前か！？ フランドル卿の鎧を盗んだのは！ お前のお陰で俺は不戦勝。せつかく正々堂々と実力で勝って、名を上げようと思っていたのに、よくも台無ししてくれたな！」

どうやら、この騎士は、スカロン卿のようだ。彼は、試合の妨害者を捕まえるため、ここで張り込んでいたらしい。次は馬を狙って来ると読んでいたのだ。

ルーシーは、まだ逃げる訳にはいかなかった。全部の馬に下剤入りのニンジンを食べさせていないからだ。スカロンと一戦まじえなければならぬ！

スカロンは、剣を引き抜くと、ルーシーに突き掛かった。

ルーシーは、金糸で輪っかを作ると、それを相手の剣先にはめる。それと同時に、魔法能力も発動した。

「雷！」

一撃で気絶するはずの電撃が、スカロンには通用しない。逆に、金系の防御を突き破り、スカロンの剣がルーシーの体を貫いた。「うっっ」

小さなうめき声を上げて、苦痛に顔を歪める。ルーシーは、そのまま瞳を閉じた。

スカロンとルーシーの顔は、まじかにあった。若くて美しい死に顔に、スカロンは思わず見とれていた。

その時！ ルーシーの髪の毛が逆立った。そして、目を開く。瞳の色は、金色だった。

「雷！」

ルーシーは、スカロンのこめかみに指先を当てた。そして、電流を流し込む。

「があっ！」

スカロンの鼻と耳から血が流れる。さらに、目からは煙が立ち昇った。

スカロンとルーシーは、その場で倒れた。

ルーシーは、もう動けなかった。剣を突き通された体は、すでに限界だ。

そんな時、信じられない事が起きた。死んだはずのスカロンが起き上がったのだ。

彼は、ルーシーに刺さった剣を、彼女の体から引き抜いた。体の中を異物が通る違和感と、それに伴う激痛が、ルーシーを苦しめた。しかし、必死に死んだふりを続けた。

「この男、人間じゃない。化け物だ！」

ルーシーは、恐怖に近い感情を抱いていた。

スカロンは、特にルーシーを気にすることもなく、剣を鞘に収めた。

そして、厩を後にした。

後に残ったルーシーは、出血が酷かった。彼女は、傷口に手を当

てると、「雷」で傷口を焼いた。それで、とりあえず出血は止まった。

「もう、師匠に綺麗な身体を見せられないな…」

そう思うと、涙が止まらなかった。

「一生に一度だけお願いします。神様、師匠にもう一度だけ逢わせて下さい」

ルーシーは、自分がどんどん弱っていくのを感じていた。やはり、願いは叶わないんだ。神にも運命にも見捨てられているんだ。ルーシーが、そう諦めた時だ。

突然、何も無い空間に、刀の切っ先が現れた。その刀は、そのまま縦に空間を裂き、切れ目を入れる。そして、そこから現れたのは、タックスだった。

「願いが叶った…」

ルーシーは、ひとこと呟いた。

タックスは、ルーシーを抱き起こした。顔色から、死期が近いことが、一目で判った。

「ルーシー、すっかりしろ！誰にやられた！」

ルーシーは、力なく首を横に振った。

「言えません。師匠を危ない目に遭わせたくないから…」

彼女の健気な言葉に、タックスは感きわまった。

「ルーシー…お前つてやつは」

それを聞いて、ルーシーは、微かに笑顔を見せる。

「お前：か、今度から、わたしの事はそう呼んでね」

ルーシーの頼みに、タックス頷くことしか出来なかった。何故なら、彼は、その場で号泣しそうだったからだ。

ルーシーは、タックスにどうしても言っておきたいことがあった。「今までありがとう、師匠。そして、…愛してます、タックス…」

ルーシーは、それだけ言えて安心したらしい。眠るように息を引

き取った。

タックスは、その場で号泣し、気絶した。  
深い暗闇の中に落ちて行ったのだ。

そして、月日は流れた。

「おい！ タックス！ 起きろよ！」

タックスは、誰かに起こされた。目を開けると、目の前に若い男がいた。好奇心旺盛な茶色の瞳。背は高いほうで、なかなかの美丈夫だ。全体的な雰囲気は、猫科の猛獣を思わせる。彼こそ、現在のタックスの相棒、コーディーだ。

「…また、ルーシーの夢を見てたのか」

タックスは、自問自答する。ルーシーが死んでから、十年の歳月が流れていた。

考え事をしているタックスに、コーディーが言う。

「さつさと行くぞ！ 日が暮れちまうぜ！ これからリサリタって名前の女に逢って、仕事の打ち合わせをするんだからよ！」  
<了>

(後書き)

この作品はタイトルにもあるように、「マイアール皇国記 魔人復活編」P214 税込み1050円で全国の書店から注文可能)の  
外伝です。  
宜しく願います

ラストミッション(マイアール皇国記外伝)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1354b/>

---

ラストミッション (マイアール皇国記外伝)

2008年11月7日06時59分発行